聖霊降臨後第２５主日）

２０２４年１１月１０日

風のように

甘木教会

牧師：竹田孝一

イエスは賽銭箱の向かいに座って、群衆がそれに金を入れる様子を見ておられた。大勢の金持ちがたくさん入れていた。ところが、一人の貧しいやもめが来て、レプトン銅貨二枚、すなわち一クァドランスを入れた。

イエスは、弟子たちを呼び寄せて言われた。「はっきり言っておく。この貧しいやもめは、賽銭箱に入れている人の中で、だれよりもたくさん入れた。

皆は有り余る中から入れたが、この人は、乏しい中から自分の持っている物をすべて、生活費を全部入れたからである。」

マルコによる福音書12:41～44

【説教要旨】

本日の聖書の日課は、「やもめの献金の物語」で、やもめの行為である「**生活費を全部入れたからである。**」という言葉は、信仰生活を続けていくことの困難さと、続ける良心の疼きを感じます。信仰から自分自身を一歩後ずさりさせます。

父が親戚の借金の保証人となって、返済するためにどんなに苦労したかを私は見て、金の力がどんなに苦しめるかを肌で感じてきました。お金こそが人を支えるのだということを実感してきました。「**生活費を全部入れたからである。**」なんて、考えられませんでした。このやもめはどうかしている。聖書はどうかしていると思っている私にあなたはどう受け止めるのかということをぶつけてきます。

ここで生活費の全部を献げろなどと言っているのではないと

思うのです。

天に宝をたくわえなさい」という説教で、金子晴勇先生は、次のように言っています。「『もし、だれかがわたしのもとに来るとしても、父、母、妻、子供、兄弟、姉妹を、更に自分の命であろうとも、これを憎まないなら、わたしの弟子ではありえない。（ルカ１４：２６）』。ここにある『捨てる』は富や宝の全面的な放棄を意味するが、それは放棄に意味があるのではなく、神との純粋な人格的関係に心が入ることを意味している。それゆえイエスは富める青年に対して『持っているものをみな売り払って貧しい人に施しなさい、そうすれば、天に宝を積むことになる』と言うが、続けて『わたしに従いなさい』と命じている（マルコ１０：２１）。したがって財産の放棄はイエスに全面的に従う意志を表明しているのであって、施し自身に意味があるわけではない。イエスは慈善家でも、その奨励者でもない。そうではなく心が専一的に神に対向するように呼び掛けており、神との人格的な関係の中にこそ真に宝があることを説いて止まらないのです」（「わたしたちの信仰」YOBEL,INC.）

「やもめの献金の物語」も金子先生が言われるように心が専一的に神に向かっている姿を語っているのです。

生活費全部、それは、私たちの命、**自分の命**(**プシュケー**)そのものだということではないでしょうか。**生活費全部**を献げるということは、**自分の命**を捨てるということではないでしょうか。**自分の命**(**プシュケー**)を捨て、空とされ、自分の心を専一的に神に向かうということです。専一的に神に向かうということが大切なことではないでしょうか。

先が不透明で、劇的に変化している社会のなかで私たちは生きています。不安な社会があります。こういうとき自分を確かなものとするために何か自分を支えるものが必要になります。手っ取り早いところでやはりお金だと思うのはごく自然です。しかし、このやもめの献金の行為を通して、私たちに一つのことを示しているのではないでしょうか。お金は確かに大切であるが、心をお金に向けるのでなく、婦人は心を専一的に神に向

ったのです。専一的に神に向かうことが、すべての始まりＡであり、終わりΩであると思います。献金は私たちの**自分の命（プシュケー）**を委ねる一つの現われであるということです。「献金はただのお金でない」ということです。「心」ですね。専一的に神に向かうという信頼の心です。

そこで起きる世とは違うドラマがここで起きているのです。先日、お二人の姉妹のお父さん江口牧師が戦前、戦後、宣教された唐津教会に行きました。整えられた綺麗な教会、活き活きと保育されている幼稚園を見ていると、江口牧師の話を思い出しました。

決して楽な生活でなかったＮさんが行商しながらいただいた一番きれいなお札を献金としてささげておられた。「その教会は戦争前、土地も建物もない貧しい、忘れられたような教会だった。不幸な戦争が始まった時、日本の教会は戦線を縮小した。その教会も定住の牧師を失い、数名の信徒が時折集まって祈りをともにするだけになってしまった。・・・・『戦争が激しくなり、集まる人がだんだん少なくなる。本部から何の連絡もない。いくたびか教会の看板を降ろそうかと考えた。月末になるとＮさんが献金をとどけに来るので、看板を降ろすわけにはいきませんでした。』戦後、日本の教会が陣容を立て直したとき、戦列に参加した数少ない教会の一つでありえたのは、このような信徒たちの忠実と祈りの賜物であった。・・・そのことを思うと、一人の人の献金というものが、どんな大きな力を持つかを思わざるをえない。」

この貧しい行商の婦人も、心は専一的に神に向っていたのです。だからドラマは起きたのです。

彼女が生きた時代も混沌とした厳しい時代でした。また、私たちも違う質の中で、厳しい大変化の時代を生きています。二人の婦人の物語は、時代がどうであっても心を専一的に神に向うことが大きなドラマを起こしてくれるということを証ししています。この時代だからこそ、富に心をむけるのでなく、心を専一的に神に向け、私を支える物からの転換をすることです。

日毎の糧

主はうずくまっている人を起こし、従う人を愛される。主は寄留の民を守り、みなし子とやもめを励まされる。　　詩篇１４６：９

ルターの言葉

神への奉仕（礼拝）は、敬い、心を尽くして愛し、あなたの信頼と確信のすべてを神におき、神のいつくしみを決して疑わないことによって成立する。

小さきもの

１４６篇から１５０篇までハレルヤで詩がはじまる。非常に整えられた詩編で、いままでの詩編の定句、定表現を連ねている。「君侯に依り頼んではならない。人間には救う力はない。」と、人に頼らず、神に頼れと促す。

では、私たちの神とはどのような神かと示す。それは同時に私たちが何ものかということを示す。池田裕氏は「旧約聖書の世界　三省堂」で、「自分の苦い過去を、つらい体験を記憶にとどめておく努力をするであろう。しかし、個人が記憶しても、それが民族の記憶に残るとは限らない。」と言い、それが旧約聖書だと言われる。146 篇はまさにそれである。神がモーセに示した「権力者が自己の地位や権力を保持するために民衆に一方的に要求する身勝手な法や禁令ではなかった」ヘブライ法が詩篇で歌われる。主はうずくまっている人を起こし、従う人を愛される。主は寄留の民を守り、みなし子とやもめを励まされると詠う。それはあなたたちの体験ではないかと。あなたたちは「自分を愛するように隣人を愛しなさい」と示す。

今、私たちの教会は、諸教育、福祉活動、とりわけ「釜ヶ崎ディアコニアセンター喜望の家」、「JELA」の活動を通して私たちは何者かを示している。「主はとこしえに王。シオンよ、あなたの神は代々に王。ハレルヤ。」と神の御心に従いつつ讃美できることを感謝して歩んでいこう。

祈り：神よ、小さき者に心を向けてくださることを感謝します。小さき者に私の心を向けていけますように。アーメン。

牧師室の小窓からのぞいてみると

2015 年、財務省が公立の先生を 3 万 7 千人削減するように文科省に迫って、10 年、今は教師のなり手がいなくて困っている。待遇改善のために残業手当を認めようと 2025 年は計画していると聞く。

教育は国の根幹ではないかと思うが、削減、改善と教育の現状と内容の外のことに目をやるのでなく、社会の変化の中で子どもたちがどのようなところにおかれているかということにもっと目を向けるべきではないかと思う。

子どもの心は傷つき、虐めはいっこうにへらない。不登校は減るどころか増えている。指導する先生方は疲れてきって、鬱などの心の重荷で昨年より 13%休職者が増えている。

一学級あたり児童生徒数が OECD の平均値を上回っている現状の改善が望まれると言われて久しい。国を思うなら新しく選ばれた政治家は真剣に取り組んでいって欲しい。

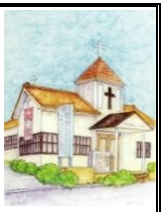
「子どもたちを私のところに来させなさい」と言われた主の言葉は教会が真剣に教育という事に向かい合うことを示しているのではないだろうか。

園長・瞑想？迷走記

2025 年度の新入園児募集中である。少子化の中でなかなか募集が思うようにならない。まあまあの園児が集まった。しかし、その内容の現実は厳しいものがあります。

「主はうずくまっている人を起こし、従う人を愛される。主は寄留の民を守り、みなし子とやもめを励まされる。」というように寄留の民の園児（在園児の３４％）を、発達特質（在園児の２２％）の園児受け入れています。しかし、このためには保育者の叡智が必要であり、忍耐が必要です。高い壁にぶつかりながらよくここまで来ていると思っています。しかし、いつまでも続けるためにはもっと努力が必要だと感じています。キリスト教の幼稚園だからできていると思っています。

甘木通信



神学生時代、ファースト教授の諸書の中の「コヘレト」の講義に感動した。それ以来、コヘレトの勉強をしている。

また、好きで勉強しているのではないが、ルターの勉強を続けている。今はどこを切ってもルターになりつつある。そんな中で、大きな影響を受けた、受けているのは徳善義和先生と金子晴勇先生だった。徳善先生からは、ルターの「ガラテヤ書大講解」の翻訳を通して、その信仰のダイナミックをいただいた。金子先生からは、現代をルターから見るという示唆を今も受けている。

「旧約聖書の『コヘレト』１２・１に『あなたの若い日に、あなたの創り主を覚えよ』というすばらし言葉がある。・・・・・この言葉を信仰の先輩から何度も聞かされてきたが、わたしはその意味を最近になってやっと理解できるようになった。それは神がわたしたち一人ひとりと共にいて、わたしたちを、一歩一歩、確実に導き、ご自身のご計画を実現なさろうとしていることである。これこそ『神の奥義』である『神の秘められた計画』にほかならない。」と（「わたしたちの信仰―その育成をめざして」　金子晴勇著 YOBEL,Inc）金子先生が言われていることを噛みしめている。

先日、私を高校生時代に信仰に導いてくださり、洗礼をくださり、神学校に送っていただいた内野牧師の母教会を唐津に尋ねて、「神の奥義」、「神の秘められた計画」を思い起こした。この歳にならなくては分からないことがわかったようになった一瞬だった。

（甘木日記）土）唐津教会を訪問後、夜に甘木来て、明日の全聖徒日の準備。いつもより一日、遅れ。**日**）召天されたご遺族、4代目の牧師・0牧師のお孫さんらと子どもたちとで30名近い。**月**）休日。早朝、主日の準備をして、休む。**火**）幼稚園の始まり。朝、色々とことをしていると出勤が遅くなりバスでいく。**水**）会計士さんと打ち合わせ、職員会議。終わるとへとへとである。**木**）幼稚園運営委員会後、筑後地区園長会研修。インスタグラムという学びは老人には刺激的。**金**）2歳から３歳のもも組さんと遠足。秋晴れの中、神の守られていることを満喫する。

おまけ・牧師のぐち（続日記）牧師だって神さまの前でぐちります。ぐちらない聖人（牧師）もいますが。

土）E牧師のお嬢さんらと唐津に。夜中、大雨警報のアラームがスマホから聞こえてくる。まずい、帰れるのか思う。どうにか雨も止み、午後からE牧師が宣教された唐津教会を訪問。また受洗牧師だったU牧師の出身教会である。教会、納骨堂と綺麗に掃除されていて爽やかな風をいただく。唐津から帰る途中、待望の鳥栖のかしわうどんを駆け込む。満足。帰り、甘木教会に向かい主日の準備。よく移動した。日）全聖徒の日、E牧師のお嬢さんらの祖父0牧師が4代目の牧師で召天されたお母さんの写真も置かれた。今年、召

された方、他のご遺族も加わり賑やかな礼拝となった。その上、幼稚園の保護者と子どもたちが来られた子ども声が聞こえる礼拝。月）休日。おくんちを見に再び家内と唐津へいく。

がらU牧師も子どものとき、青年になり山車を引いたのだろうかふと思う。昼食はちゃんぽん、あっさりした醤油味で上手かった。５００円帰りに博多・天神に寄り、時を遊ぶ。火）幼稚園が始まる。春花壇の用意。職員の休暇を巡って、ブラジルに知った感覚と日本の違いを感じる。日本人はまじめであるが私はこの感覚に疲れる。幼稚園運営委員会に出す書類の原稿書きで一日中かかる。昼食だけの開く店にハンバーグ、クリームコロッケの定食を食べる。７００円。水）色々とあった一日であった。厳しい幼稚園の現実の前にどう正面から向かい、逃げないかということです。細かいところまで会計士さんと打ち合わせ。色々な書類を作り、メールをしていると次の日になっている。

木）朝、五時半に起床。起きてすぐにメールの返信。東京への飛行機券の支払い。手数料はばかにならない。銀行で暗証番号を忘れるというハップニング。老いである。帰る途中カトリック教会のおもしろい自然現象。吉、凶のどちらか。今日運営委員会、筑後地区幼稚園園長研修会。忘れていていた。(笑)インスタグラムについての学びは、使えるように自分をしたいと思う。さらに勉強しよう。信徒さんから積極的な提案がＳＭＳで来る。

嬉しい。感謝。金）２歳から３歳のもも組さんと秋晴れの中、遠足。孫を思い出し、心温められる。青空の下の弁当は美味しくて、美味しくて。少々、疲れが。